



War Cry

6月号

福音版
2023
June
No.2853

二〇二三年 六月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

かなしみを 共有できれば

三澤 良子



数年前にお腹を三十センチほど切る手術をしました。悪性でないと判明して安堵したのもつかの間、お腹の中に菌が広がり敗血症に陥りました。直ちに緊急手術を受けて危険な状態を脱することができましたが、敗血症の後遺症で腎臓障害を起し、入院を繰り返しました。徒歩三分のストパーに行っても、痛みがあまり帰り道でうずくってしまふこともしばしば……。同時に胆のう炎も患ったために、一年で十回近く手術を受けました。

夜間に体調が悪化すると、すぐに受診すべきか明朝まで待つべきかで悩みました。宿直だった主治医に

「ああ、これはしんどかったですよ」
と云われた時は本当にほっとしました。痛みをわかってもらえたと思えたのです。

イエス様は旅の途中、重い皮膚病を患っている十人の人に出会いました(聖書・ルカによる福音書17章11〜19節)。

「イエスキヤ、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください。」
聖書の時代では、重い皮膚病を患った患者は、病気が

ら完全に回復したと祭司が認定するまでの期間、コミユニティから隔離措置をされていました。だからイエス様を見つけた患者たちは、遠くから叫ぶしか方法がなかったのですが、メシアと噂のイエス様を見てどれほど胸が熱くなったことでしょうか。イエス様なら自分たちの痛みをわかってくださると願ったのでしよう。イエス様はその心を排除しませんでした。

「すぐれし医者なるめぐみのイエスは、やさしきみことば かけさせたもう
めぐみあふるる たえなるみ名は あめにも地にも たぐいぞなき」
(『救世軍歌集』37番)

さて、イエス様は重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行つて、体を見せなさい」と言われました。彼らはそこへ行く途中で病気が治つたと気づきました。ただ、イエス様に感謝を伝えるに戻つて来たのは十人のうち一人だけでした。

実は、私も病気が治った当時は回復した実感がありませんでした。またすぐに熱が出るだろう、痛みがぶりかえすだろうと恐れながら、再入院の支度を整えて

暮らしていました。へ：あれ？ 大丈夫だよ？」そんな日を重ねて、ようやく治つたと実感するに至ったのです。

九人が戻つて来なかった真相は不明ですが、主治医は患者の病を誰より熟知しています。誰がどのような課題をもっているか、イエス様はちゃんとご存じで、その叫びに伝えてください。そしてイエス様は、ついには十字架にかかり、すべての人を救うための見返りを求めない愛を示してくださいだったので。この愛は、現代を生きる私たちにも等しく注がれています。

ぜひお近くの礼拝にお出かけください。もし病気を患つておられるならそのことを、それ以外の課題があるならそのことをイエス様に打ち明けるために、お祈りにいらっしやいませんか？

イエス様はあなたのかなしみを共有したい、と心から願つておられるのです。
「命のある限り
恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまらるであらう。」(詩編23編6節
(救世軍士官(伝道者))

* 「油を注がれた者」の意味で、「救い主」を指す言葉



神様からの平安を いただいて

つくだ あつこ
附田 敦子 さん (救世軍函館小隊所属)

イエス・キリストは、彼を信じ従う人々に「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」と約束なさいました。キリストを信じ、聖書の御言葉みことばに立つて信仰の生活を続けておられる附田さんの証言をお届けします。

信仰のこと、家族のこと

私が属している救世軍函館小隊(教会にあたる)は、今年開戦百八周年を迎えます。多くの先人の方々の祈りと思いを引き継ぎ、これからも永く残ってほしいと願っています。

函館小隊は常駐の士官伝道者だんどうが不在となって六年目となりますが、コロナ禍にも聖別会(日曜朝の礼拝)は守られ開かれています。信徒が協力し合い、会館を開け、祈禱会や礼拝、活動が続けられています。Yさんが主に聖別会でメッセージの役割を引き受けてくださっています。心より感謝しています。

私と函館小隊との関わりは、一九七九年頃、子どもたち(長男高明六歳、長女明子四歳)が日曜学校に通い始めたことから始まり、子どもと共に祈り、聖書の学びをし、聖別会に出席と

なりました。信仰への道は、自然に導かれていたのです。一九八一年七月十二日、兵士入隊(救世軍の正式な信徒(兵士)となること)をしました。その時に与えられた御言葉はヨハネによる福音書一五章一六節でした。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」

小隊に通うのを続けられたのは、夫・晃の送り迎えがあったからです。二十数年前には、函館朝禱会あさねがひに導かれました。これは函館と道南の教会に通う人が集う祈禱会で、毎月第二の土曜日、月ごとに当番教会が担当し、月ごとに違う教会で開催されました。信仰の成長の助けとなりました。間もなく夫も朝禱会に出席し、共に祈りの時をもつことができるようになっていきました。しかし相変わらず夫

は、信仰告白をすることなく、小隊には私の送り迎えのみが続いていました。私は、夫の救いのために日々祈り、機会を見つけては、いろいろなところで多くの人に祈っていただきました。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」(使徒言行録16章31節)

願っていたことが現実となったのは、二〇〇五年でした。函館小隊開戦九十周年の記念聖別会において、

試練の時

二〇一〇年、夫は、脳梗塞(ラクナ梗塞)のため入院、早期に治療が始まったので、間もなく回復、後遺症もなく一カ月で退院でき、ホッとしました。

ところが二〇一三年四月、家で大出血のため倒れ身体が動かなくなり、救急車で搬送されたのです。診察の結果、大腸からの出血、しかも身体の血液の三分の二が出てしまい、輸血が始まり手術となりました。大腸の約半分を切除し、人工肛門・ストーマとなってしまいました。続いて気管切開術、その後膀胱結石除去術

夫は兵士入隊の時を迎えたのです。祈りが聞かれたのです。



と、大変な日々でした。その間意識がなく、ICUでの三カ月間の闘病生活でした。その間、多くの方々の祈りがあり、感謝でした。平安がありました。

七月に入り夫の意識が戻り、間もなく車椅子移動が可能となった時は、驚きと感動でいっぱいとなりました。その後リハビリのため転院となった先の病院で治療、訓練が続けられ、十月七日に退院。ホッとしたのもつかの間、十月九日腹痛のため再入院、腸閉塞でした。その後も次々に病との戦いでしたが、十一月一日



社会鍋に立つ



子どもたちが幼い頃



2005年、夫の兵士入隊式(前列左から二人目が筆者)

退院となりました。退院後は、週二回リハビリ中心のデイサービスに通所、健康のため、自立のための日々を送っていました。

二〇一五年頃、今度は長女・明子の体調がすぐれず受診、腎不全と診断され食事療法と薬での闘病生活が始まったのです。

二〇一八年、夫は、大腸切除術から五年後、再び大腸の具合が悪化、再手術のため二月一日入院、手術となりました。しかし、手

術後の回復がなく、五月二十五日に呼吸が停止、召天となりました。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(コリントの信徒への手紙一 10章 13節)

夫の闘病中も信仰生活を続け、病室で二人で祈り、御言葉をいただいていた。最後まで平安のうちに過ごせたことは、感謝でした。



〈短歌〉

夫けふ召天となりぬ御国への
旅路を思ひ祈り続けむ

わが夫は七十五歳十カ月の生涯にて共に暮らし四十九年間

娘・明子とのこと

その頃、娘・明子も体調がすぐれず入院を繰り返し、つらい日々を送っていました。

二〇一八年十二月に連隊(北海道地区)指導者(当時)の士官が病院にお見舞いに訪ねてくださり、明子のために祈ってくださいました。明子も私も平安をいただきました。数日後、急速に悪化、食事も摂れず、体力が落ちてしまい、二〇一九年一月六日召天、四十三歳の生涯でした。闘病生活との決別でした。

明子が健康で元気な時、

日々の生活とこれからのこと

現在、私の一日の始まりは、朝の祈りからです。祈りの表を作成し、それぞれの方々の顔を思い浮かべて祈り、平安をいただいています。



夫も元気であった時には、娘と二人であちこち国内旅行を楽しみました。買い物や外出はいつも一緒でした。良い思い出が多く、今も懐かしく思い出されるのは、恵みです。しばらくはポツカリ心に穴が開いたようになっていましたが、不安はなく、守られ、平安をいただいています。

その後私は、七十六歳からボタニカルアートとブルースハープを習い始めました。いつかブルースハープで賛美したいと願っています。

す。日々感謝の祈り、とりなしの祈りをし、生涯を献げて伝道する士官を志す人が一人でも多く与えられるよう、多くの方々が神様からの

召しを受けますように、と祈ります。

週の初めは小隊で聖別会に出席し、心より主を賛美、礼拝し、御言葉をいただき、交わりの時を大切にしています。コロナ禍の最中は移動制限のため、それまでしていたような、札幌の連隊本部(地区本部)や本宮(東京にある救世軍の本部)から士官が来函しての説教応援が困難となり、Yさんが毎週連続でメッセージを通して御言葉を取り次いでくださっていました。コロナが収まり始めてからは、月一回は札幌から、今年の二月からは東京からの応援が再開され、ホッとしました。函館小隊の聖別会の出席者は少ないのですが、互いに相手思いやり、和やかな雰囲気の中で良い交わりの時がもっています。

週二回はリハビリに通所しています。二年前、家中で植木鉢を持つまま転び、胸椎十二番を骨折してしまっただけです。

函館朝拝会は五十数年続いていますが、コロナのため休会中です。毎月メッセージ、祈りの課題のプリントを届けてくださいますので、朝の祈りの時に用いています。

今年三月二十四日で八十歳となりました。本年の救世軍標語は「更なる深みへ」で、コロサイの信徒への手紙二章七節

「キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい」の御言葉をいただいています。これからの一年を悔いのない時とし、主と共に歩ませていただき、主に喜ばれる日々を送りたいと思っています。感謝。



2022年秋、小隊の皆様と(右から二人目)

創立者 ウィリアム・ブース 大將 ブライアン・ペドル (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 スティーブン・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈英国〉「Others」 ～希望の貿易～ 25周年記念展示会

救世軍には、フェアトレード (先進国と開発途上国の経済的格差を解消する公正な貿易) の独自ブランド「Others」(アザーズ)があり、ハンドメイドの衣類、アクセサリ、キッチン用品、家庭用品などを扱っています。「Others」製品の生産者たちは、多くが貧困や人身取引の危険がある環境に生きる人たちで、「Others」はそれらの社会的不正と戦い、弱い立場にある人々が希望と自立と尊厳を得るために活動を続けています。バングラデシュとケニアで、現在、800人以上の職人が生産者として携わって



ケニア：サイザル麻を使ったバスケット作り



バングラデシュの生産者

います。1997年にバングラデシュで取り組みが始まり、今年で25周年を迎えたことを記念して、4月にロンドンの救世軍万国本営(国際本部)で展示会が開かれました。職人たちが作る美しい製品と、彼らの人生のストーリーが紹介されました。ケニア出身のマグダリーンはこう語っています。「私は『Others』の女性たちからたくさん手工芸の技術を教わりました。作った製品を販売し、子どもたちを学校に通わせることができるようになりました。シングルマザーであり祖母でもある私にとって、大きな力になりました。グループのおかげで目的意識が芽生え、自分の居場所があると感じるようになりました。経済的な面だけでなく、精神的にも私の生活は向上しています。」

「Others」の使命は、分け隔てなくすべての人をケアし尊重すること、働く人が公正な報酬と支援を受けて、搾取から解放されること、健康で安全な、自立した生活の質を向上させること、収



益の還元によってより多くの雇用機会を創出すること、です。これらは、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」のうち、「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「すべての人に健康と福祉を」「質の高い教育をみんなに」「ジェンダー平等を実現しよう」「働きがいも経済成長も」「人や国の不平等をなくそう」の7つの目標に合致しています。

職人たちの手仕事による製品を日本でも購入することができます。お問い合わせ、カタログ希望等は、救世軍本営出版供給部までどうぞ。

メールアドレス
jpn.trade@jpn.salvationarmy.org



救世軍とは? What is The Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置き、世界133の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、家のない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や子どもたちに助けの手を伸べつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して、救世軍の働きが始まりました。小隊(教会にあたる)での伝道と、廃娼運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代に先駆けてさまざまな働きを進めてきま

した。現在、救世軍ブース記念病院(東京・杉並区)と救世軍清瀬病院(東京・清瀬市)は、両病院ともキリストの愛の精神を模範とし、病める方々とご家族に寄り添うことを理念に掲げ、医療と介護の働きに取り組んでいます。なお、救世軍では毎年6月第一日曜日を「医療サンデー」と定め、病と向き合う多くの方々のため、医療従事者のため、祈る日をもっています。※救世軍の病院の詳細については、両病院ホームページをご覧ください。



救世軍ブース記念病院



救世軍清瀬病院

救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。